



きらっとひかる

ひかる



よしお さかえ
吉岡 栄さん
吉岡刺繍工芸店 社長

D 事業所名 吉岡刺繍工芸店
A 創業 1967年10月
T 事業内容 オリジナルロゴマーク刺繍および美術刺繍の製造
A 所在地 長野市篠ノ井横田539-1 TEL 026-292-2309

1938年、千葉県生まれ。大手ミシンメーカーに入社後、家庭用ミシンと工業用ミシンの国家技能士を取得。知己を得て、1967年に長野市に移住、吉岡刺繍工芸店を設立。写真が趣味で、54歳の時にさらなるスキルを求めて東京の写真専門学校に入学。2007年～2019年まで長野読売写真クラブの会長を務め、数々のコンクールで受賞歴もある。また、庭園管理士も取得するなど、知識と技術の集積にも意欲的。



卓越した技法と特殊ミシンを駆使して ミシン職人が描き出す刺繍の芸術品

今春5月15日(日)、善光寺御開帳で賑わう中央通りを「篠ノ井大獅子」が練り歩き、善光寺山門にて奉納式と奉納舞が執り行われました。大人3人で操る巨大な獅子頭の前垂れを制作したのが、吉岡刺繍工芸店の吉岡栄さんです。横振りミシンという特殊なミシンを駆使して、芸術的な美しさを生み出す吉岡さんの工房を訪ね、ミシン刺繍の魅力について語っていただきました。

選び抜いた金糸と銀糸で 大獅子の前垂れに刺繍

「篠ノ井大獅子」は、篠ノ井の内堀地区と芝澤地区に大正時代から伝わるもので、毎年7月の篠ノ井祇園祭で奉納行列が行われています。また、2007年には長野市の無形民俗文化財にも指定されました。善光寺御開帳に参加するようにしたのは、2009年から。オール長野市で善光寺御開帳を盛り上げようという気運の高まりから、御開帳を彩る大きなイベントのひとつとして篠ノ井大獅子の奉納舞も行われるようになりました。



紫の生地に、「篠ノ井大獅子保存会」「内堀」「長野市無形民俗文化財」と刺繍されている

今年の善光寺御開帳「篠ノ井大獅子奉納」は、中日庭儀大法要が終わり、御開帳の折り返しとなる5月15日(日)に行われました。セントラルスクエア前から善光寺山門前まで約3時間、絢爛豪華な屋台を従えて続く奉納行列。重さ約60kgの獅子頭には化粧まわしのような紫色の前垂れが垂れ、軽快なお練りの足さばきに合わせて風にひらひらと動きます。前垂れに刺繍された「内堀」の金糸は、吉岡さんが熟慮して選んだものでした。

「紫色も縁起の良い色だから、その生地に映えるように、文字も縁起の良い金糸と銀糸を選びました」。

ワッペンから記念品まで 幅広く受注制作

吉岡さんは、千葉県出身。東京にある大



二羽の鳳凰が描かれた大作。角度によって色が変わるのも刺繍作品ならではの



横振りミシンを操る吉岡さん。80歳を越えた今も第一線で活躍している

「5年前から週4日のペースでスポーツジムに通っています。ジムではストレッチを重点的にやっつて、そのあと2時間くらいはスイミングで汗を流します。ジムに行く日は、1日2食が基本です。そのほうが体調がいいんですよ。」
これからも、充実した人生からどんな刺繍の芸術品が生まれるのか楽しみにしたいと思います。

洋服、企業のロゴマークを施したユニフォームやコート、記念品や祝い品の美術刺繍まで依頼は増えていきました。

**自分だけにしか出せない
刺繍の表現を**

吉岡さんの使う横振りミシンは、字のこたく横に針を動かして使うミシンで、コンピュータミシンでは出せない立体感や迫力、温かみのある風合いを出せるのが魅力です。制作工程では、自身が撮影した写真などをもとに下絵を描き、それをただ転写するのではなく、ひと工夫を加えながら独創的な構図に仕上げていきます。刺繍糸は、堅牢染めという色落ちしにくい糸を使用。洗濯で変色することもなく、紫外線による退色にも強い性質を誇っています。

さて、現在84歳の吉岡さんは、ますます意気盛んです。この12月には、JR篠ノ井駅近くの「喫茶アイ」で、これまで制作した刺繍絵画の個展を予定しています。健康長寿の秘訣をおうかがいすると、